

二〇二六年

入学試験問題

国語

- 一、試験開始までこの問題冊子の中を見てはいけません。
- 二、この問題の試験時間は六十分間です。解答はすべて解答案紙（マークシート）にマークしてください。
- 三、問題と解答は、声を出して読むではいけません。
- 四、印刷がはつきりしない場合のほかは、問題についての質問は受けません。
- 五、終了の合図で、すぐ筆記用具を置いて答えの記入をやめてください。
- 六、この問題冊子は回収するので、持ち帰らないでください。
- 七、試験中は、監督者の指示に従ってください。
- 八、不正行為があった場合は、解答をすべて無効とします。

（問題文には、出題の必要に応じて変更を加えた部分があります。）

1

次の文章を読んで、後の問い（解答番号①～⑦）に答えよ。

地球レベルでも世界レベルでも、希望や期待をもって未来を見通すこと自体が容易ではなくなっており、このような時だからこそ、現在（「今」）の視点から、人間の経験・活動の蓄積の結果である歴史を学ぶことの持つ意味は大きいと考える。そして、価値観や歴史認識を異にする人びととの間での具体的な対話や交流を促し、国際的な相互交流を進める必要性も明確になっている。インターネットやソーシャルネットワークの進化によって、多くの新しい知識や情報を得ることができ、国や地域を超えて見ず知らずの人びとと意見を交わすこともできるようになってきたが、その一方で、独りよがりで、見たいものしか見ようとせず、耳ざわりの良いものしか聞こうとしないで、フェイクニュースやヘイトニュースを送受信しても疑問をすら持たない、自称「愛国者」たちも増えており、結果的に自国・自民族第一主義を拡散させているのではないかとと思われる。

そのなかで、真摯に歴史と向き合うこと、歴史から真摯に学ぶことが重要で、歴史系博物館には、こうした「内向きの『二国史』・『一民族史』」的歴史観を相対化し、誰もが映像・写真や文献資料を含む「モノ」資料などによる展示で示された歴史や文化を享受できるという役割が大きくなっていくのではないかと考える。

そのなかで、とくに重要なのは、展示しにくい歴史、展示したくない歴史、すなわち「語りたくない負の歴史」（国民に知らせたくない国家的な犯罪など）や「暗い過去」と向き合うこと、そうした「負の歴史」に関わる展示をめぐる意見の異なる人びとと議論することだと考える。

以下、この点に関して、二〇一七年のICOM（国際博物館会議）の統一テーマ「歴史と向き合う博物館」に関わって報告したことを中心に、歴史系博物館の可能性について考えてみたい。

とはいえ、「負の歴史」と向き合うことは博物館にとっても容易なことではない。とくに、日本の公立の歴史系博物館にとっては、きわめて重くむずかしい問題で、真剣に考えている学芸員も少なくない。しかし、「観光マインドのない学芸員なんていない」などと言われ、地域の文化財の観光への活用までも担わされるようになるなかで学芸員には、このような重い課

題に取り組むだけの意欲も余裕もなくなっていくのではないか。

しかし、さきほど述べたように、ほんとうはとても重要な現実的課題だと考えるので、ここでは、日本の歴史系博物館（平和博物館も含めて）で「戦争」を展示することの問題点について触れたい。日本の歴史系博物館の現状と、それでも博物館でできること（博物館の可能性）について、論点を少しでも共有できればと考えるからである。

では、現在の日本の歴史系博物館が抱えている課題はどのようなもので、それでも何ができるのか、について二点ほど私見を述べたい。

第一に、前提としておかなければならないのは、「近代的」博物館・美術館は、近代国民国家形成と関わって形成されてきたので、ナショナル・アイデンティティ⁽²⁾ 国民の意識（歴史意識）の形成に関わり、とくに歴史的・文化的な「物語」を創る（再発見・再解釈する）ことによって「国民を創る」という役割を担ってきたという、周知のことであり、この点をどのように克服できるか、ということである。その政治性は隠しようもなく、「政治的中立」を博物館に求めることは現実にはきわめてむずかしい。この点は、後述するように、とくに戦争記念館など、国家の戦争の記憶を伝えるところでは顕著である。「自国の兵隊」が「自国」のために経験したことを「自国との関係」を前提として展示することで「記念」し、「記憶」を未来へ、戦争を経験していない世代へと継承することを目的としているがゆえに、それと異なるストーリーはもともと想定されていない。国民国家の国民統合の意思がもつともわかりやすいかたちで現れるのである。

A、もつとも政治に左右されやすい歴史系博物館とはいえ、現在のドイツの歴史博物館の主張に典型的なように、「一面的でナショナルなパースペクティヴや^(注2)メインストリートの視点からは歴史や文化を示すことはできない」というのが、近年、現在までを展示しようとする世界の歴史博物館の潮流である。残念ながら日本⁽³⁾の近現代を展示する歴史博物館は、この点では後れを取っており、それ故に、博物館としての政治性や恣意性には留意しつつも、「一国史」にならないように、ジェンダー的視点や少数民族の視点から、しかもグローバルにみることを重視して展示をすれば、その歴史展示の持つ可能性を現代社会において広く共有することができるのではないかと考える。

その意味では、とくに、戦争・公害・災害（人災）や少数民族をめぐる矛盾・対立など、権力にとって、触れたくない（触れられたくない）「負の歴史」や継承したくない「負の記憶」を展示に組み込むことによって、国民に知らせたくない国家的な犯罪など博物館がそれをめぐる論争をどのように提供できるかどうかということが鍵になってくる。

第二に、歴史系博物館の来館者のなかに、しばしば見られる「歴史博物館には正しい歴史の事実（史実）が展示されている」という、意外に根強い言説（思い込み）に対して、いかに対処できるかという点である。

「この点だけは事実だ」ということがないわけではないし、歴史学とは、史料批判を行って、こうした歴史的事実に少しでも近づき、広く共有することを目指した学問である。歴史系博物館の展示は、史料批判を経た資料から過去を読み解いて、それを並べることで、ある歴史像を示すと言う点では歴史学の研究方法と変わりはない。その意味では、実証に裏付けられた展示をすることが大原則ではあるが、膨大な資料の中からほんの僅かの資料を選択して、ある順番に並べる過程で、「X」ということになってしまうことは否めない。展示したものだけでは、十分に歴史を可視化することはできない、これも周知のことに属する。写真や映像に写っていることは事実ではないか、とも考えられがちだが、映像を撮った人の目や感性に規定されており、ある方向から切り取った像にすぎないのである。全体ではないのである。ここでも、戦争について言うとき、そもそも「事実」とは何かが鋭く問われており、このことは、たとえば大岡昇平が何度も何度も繰り返し、『レイテ戦記』に手を入れ続けざるをえなかったことを想起すれば理解できる。一つの史料、一つの証言で、「事実」が異なってしまう可能性があるのである。さらに、現代の戦争では、攻撃する側が記録し、見せる映像からは、被弾した人びとの「現実」は見えなくなっている。否、映像に映っていないから、というだけではなく、むしろこうした映像は隠される、といったほうがよいかもしれない。この点では、戦争博物館のなかで展示されていないことは何か、ということに注目する必要がある。

実は、戦争に関わる展示をしている歴史系博物館あるいは資料館は、靖国神社境内にある遊就館や、昭和館・しょうけい館（戦傷病者史料館）・平和祈念展示資料館などのほか、空襲の被害を受けたところを中心に、自治体がつくったものだけでも三〇以上存在している。ほとんどのところで、戦争の悲惨さと「平和の意義」が「説かれて」おり、「平和」が「祈念」され

ている。こうした戦争に関する博物館の多くが、戦争は嫌だ、日本国民は平和を求めている、という国民意識を醸成してきたという点で大きな役割を果たしてきたことはたしかだと思われる。しかし、展示で欠落している、あるいは十分に説明されていないものは何か。空襲の被害については詳しく描かれ、その郷土の兵士の遺品や戦争中の「銃後」の人びとの苦しい生活に関わる日常品なども展示されるが、実は戦争がなぜ始まったのか、についての説明が十分ではないところの方が多い。

この点での論証は難しいとしても、パネルの中には、戦争は、誰かが始めたものではなく、自然に「起こった」ものであるとしか読めないものも多い。また、郷土の兵士がどこで戦ったのかは記されているが、兵士と関わったその地域で暮らしていた人びとについての記述はほとんどない。郷里に帰ってきた兵士たちが、自分の「加害」については語らないということも関わって（兵士による加害についての「忘却」、自分たちは被害者で、自分たちにかかわりのある人びとが他方で「加害」に関わっているのだということは忘れられてしまうことになる）。

このように、たとえば、戦争について考えるならば、展示で示されていないところにこそ、戦争を経験していない人びとが知っておくべき点があるのだが、展示されるべきものがどのようなもので、そのうち何が欠けているのか、を見極めることは極めて難しい。展示されている「モノ資料」と向き合って、その資料から読み取れることを自分の力で考えるというトレーニングを繰り返すしかないように思われる。その意味では、博物館こそ、来館者と、「モノ資料」との対話を促すアスレチックセンターでもあるのである。

また、現在の韓国・北朝鮮や台湾などを植民地としていた時期のことについても、教科書ではある程度書きこまれているのに、博物館の展示で十分に示すことができていないのかというと、それも心許ない。第一次世界大戦後、一九一九年に日本の植民地支配に反対して起こった中国の五・四運動や朝鮮の三・一独立運動については、パネル一枚がぎりぎり、関東大震災時の朝鮮人虐殺に関わる展示をしている博物館は日本でいくつあるだろうか。歴史認識を異にする国民間で、「事実」を共有することがいかに難しいかについては、日中韓三カ国の間で未だに共通の歴史教科書が学校教育の現場で利用されているとはいえないことから考えても明らかである。歴史を展示するときに難しいのは、厳密な史料批判を経て展示する「モノ」そのもの

は、かつてたしかにつくられたという意味で「事実」であっても、何を、どのように、並べるのかということになると、どうしても並べる側、展示する側の主観（歴史観）が入ってしまうという点にある。C、歴史展示を「つくる」側には、歴史相対主義の陥穽^{かんせい}に陥ることなく、歴史とどのように向き合うかが求められる。テッサ・モリス・スズキの言葉を借りると、「歴史への真摯^{しんし}さ」が厳しく問われるということになり、この点が少しでもおろそかになると、その歴史展示は、議論の対象たりえないということになる。展示をする側に求められる課題も大きいのである。

（久留島浩「歴史系博物館の可能性」より）

（注1） パースペクティヴ＝視点。見方。

（注2） メインストリーム＝主流。本流。

問1 傍線部①「こうした『内向きの』『一国史』・『一民族史』的歴史観を相対化し」とあるが、そのためにどのような展示が

望ましいと筆者は考えているか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は①。

- ① 自文化を絶対化せず批判的に歴史と向き合い、国や地域を超えて共存共栄を図ろうとする展示。
- ② 歴史認識を異にする人びととの間での対話や交流を促し、歴史認識を一致させようとする展示。
- ③ ジェンダーや少数民族の視点、なおかつグローバルな視点をもって、歴史と真摯に向き合う展示。
- ④ インターネットやSNSとは一線を画し、新しい知識や正しい情報を提供しようとする展示。

問2 傍線部(2)『国民を創る』という役割を担ってきた」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は[2]。

- ① 他国への加害の記憶を伝え、戦争の悲惨さと平和の意義を説くことにより、「日本国民は平和を求めている」という国民意識を醸成してきたということ。
- ② 膨大な資料から過去を読み解くなかで歴史的・文化的な物語を再発見し、特定の歴史像を示すことで国家のアイデンティティを対外的に発信してきたということ。
- ③ 文化資源を活用して国民の教養の向上に資するとともに、観光の拠点として地域における文化・観光・経済の推進に寄与してきたということ。
- ④ 自国の歴史や文化を物語として共有し、次の世代に伝達することで、人びとを国民という意識のもとに統合する機能を果たしてきたということ。

問3

空欄

A

く

C

に入る語句の組合せとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は

[3]。

- | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|-------|
| ① | A | しかし | B | もちろん | C | したがって |
| ② | A | むしろ | B | たとえば | C | だからこそ |
| ③ | A | 他方で | B | たしかに | C | ところが |
| ④ | A | ところが | B | 仮に | C | あるいは |

問4 傍線部③「世界の歴史博物館の潮流」とあるが、どのような姿勢が主流となっているのか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は□4。

① 政治に左右されやすいという歴史博物館特有の性質を克服するために、政治的な中立を維持して、戦争を含む歴史について正しく解釈しようとする姿勢。

② 自国中心的な歴史観から脱却し、戦争や公害、マイノリティをめぐる矛盾や対立などの、権力にとって不都合な記憶をも伝える姿勢。

③ フェイクニュースやヘイトニュースを発信する人びとに対して、所有する資料をもとに反論することで、自国・自民族第一主義に対して疑義を示そうとする姿勢。

④ 歴史を恣意的に修正することを避け、歴史認識の個性を尊重しつつも絶対的な価値や倫理観を重視し、普遍的な歴史観を追求しようとする姿勢。

問5

空欄

X

に入る表現として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は□5。

① ねつ造された物語

② 両義的な解釈

③ 切り取った過去

④ 歴史学からの逸脱

問6 傍線部④「戦争博物館のなかで展示されていないことは何か、ということに注目する必要がある」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は[6]。

① 映像は撮影者の目や感性によって規定されるものであるのに加え、現代の戦争においては、攻撃された側の悲惨な映像は攻撃した側によって隠されているため、攻撃された人びとに対する罪の意識を感じることが難しいから。

② 歴史における事実の全体をその時代の人びとが把握することは困難であり、戦争の是非については、時間とともに明らかになっていく事実の検証が必要なため、後世の人びとの判断にゆだねることになるから。

③ 戦争に至る経緯や理由が部分的にしか伝えられず、被害については詳しく語られるが加害については語られないことが多いため、展示の内容のみから戦争の実態や全体像をつかむことは難しいから。

④ 戦中・戦後の暮らしを伝える史料が多く展示されているも、必ずしも正しい歴史の事実が示されているわけではないので、人びとは展示されていない内容をも含めて各自の歴史観を創る必要があるから。

問7 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は[7]。

① 「歴史博物館には正しい歴史の事実（史実）が展示されている」という先入観に対して、実証に裏付けられた「確定した過去」を展示することしかできないという事実を伝え続ける必要がある。

② 歴史認識の相対性を重視するあまり、異なる立場の間で「事実」の共有が不可能になることを回避しつつ、主観が入ってしまうことにも留意しながら史料批判を行うことで、人びとに議論の対象を提示することが求められる。

③ インターネット上の情報は根拠が不確かで、自国を称賛する偏った主張もしばしば目につくので、正しい歴史像を示している歴史系博物館の情報を重視するよう国民に呼びかけることが望ましい。

④ 第一次・第二次世界大戦の歴史認識をめぐるのは、国内でも統一的な見解が得られていないだけでなく対外的にも摩擦が絶えないが、あえて独自の歴史観を提示して、意見の異なる人びとと議論する必要がある。

感染症について議論するときに、文化の存在が取り沙汰されることがある。例えば、「西アフリカの人々はコウモリを食べる文化をもっているので、エボラ熱が発生したのだ」とか、「西アフリカの人々は遺体を素手で洗う文化をもっているので、エボラ熱が拡散したのだ」とか、言われることがある。これらの言明は、いわゆる「リスク行動」を指弾するものであり、そのようなリスク行動がとられる理由を文化によって説明するという話法をとっている。

症のパンデミックにおいては、感染症の制御の成否を文化によって説明するということもたびたび見られた。日本の「空気を読む」文化が感染症対策に親和的であったとか、だからこそ、政府の権威主義的な振舞いを助長させたのだとかいう発言が頻繁になされていたことは、記憶に新しい。

ここに見られるのは、「障害としての文化」という発想である。これは、（感染症を制御できる、自由を拡大できるといった）あるべき状況を達成するための障害になるような文化が存在する、という発想である。インホーンとブラウンは、このような形で文化について検討できることが、まさに人類学の有用性を示すものだと考えていた。二〇一四年の西アフリカにおけるエボラ熱の流行に際して、英語圏の医療人類学者たちが迅速に反応したように、文化の専門家として人類学者が何かしら貢献できる可能性は今でもある。

この貢献可能性の源泉には、人類学が理科系のものとは異なる人間についての考え方を発展させてきたことがある。やや戯画化されたイメージであることをご容赦いただきたい。理科系の学問分野では、人間について考える際に肌の内側に存在している生物学的な特徴に焦点を当てるのが一般的である。そして、この生物学的な人間についての理解は普遍性をもっていると考えられている。ここでいう普遍性とは、「いつでもどこでも変わらない」ということである。例えば、「人間は細菌やウイルスに感染することで病気になる」、「人間は水分補給が滞ると死ぬ」といった特徴は日本で暮らしている私たちも、アメリカやフランスで暮らしている人も、インドやガーナで暮らしている人も変わらない。同じように、上記の特徴は、現代を生きて

いる私たちだけでなく、江戸時代の人にも平安時代の人にも妥当すると考えられている。このように、生活している場所や環境、あるいは時代が変化しても、変わることはない人間の普遍的な特徴について、理科系の学問分野は探究する傾向が強い。

B、生物学的に普遍的な人間の特徴について知っていれば、つねに問題なく感染症に対処できるわけではない。感染症に限らず、医療現場で出会う人々に適切なケアを提供するためには、その人の生物学的な特徴だけでなく、社会的な特徴、すなわち肌の外側とどのような関係を取り結んでいるのかについても知っておく必要がある。普段どのような生活をしているのか、どのような人生を歩んできたのか、家族構成はどのようなものかといったことがらは、その人の治療プランを練る際や入院についての判断を行う際に、必要不可欠の情報となる。この社会的な特徴は、生物学的な特徴とは異なり、いつでもどこでも普遍的に妥当するわけではない。その人が世界のなかのどのような地域で生まれ、どのような家庭で育ち、どのような職に就いていたのかといった、個別的な事情によって大きく変化してくる。

C、本節の冒頭で述べたように、人類学が感染症について議論する際にしばしば取り上げてきたのは、生物学的な特徴とも社会的な特徴とも異なる、文化的な特徴と呼ばれるものであった。

文化的な特徴がどのようなものとして想定されてきたのかを理解するためには、それが、「ある一定の集団のメンバーが共通してもっている特徴」だということを、まずはおさえておく必要がある。例えば、日本で生まれ育った人の多くは、箸を自由に使うことができる。あるいは、ソメイヨシノの花の写真を見たときに、その写真が撮られた季節を想像することができる。これは、人間であれば、生活している時代や場所にかかわらず可能なことではない。また、これらのことは、特定の個人が特別に優れているからできるような個人的な特徴でもない。日本で生まれ育った人間が、集団として共通してもっている特徴である。

このような文化的な特徴は、様々な大きさの集団について見出^{みい}だすことができるが、感染症について議論する際には、地域単位や民族単位での文化的な特徴が、しばしば注目を集めてきた。世界はどのように成り立っているのか、人はどうして病気になるのか、死者をどう埋葬するべきか、といった医療と密接に関係する考え方の違いは、このレベルの文化的な特徴として

表れてくることが多いからである。具体的なイメージをつかむために、これまでに世界各地から報告されてきた例のなかから、代表的なものをいくつか紹介していこう。

医療実践において文化に留意する必要性を提起した初期の研究に、グアテマラ高地に暮らす農民たちの薬剤に対する認識の仕方が、処方された薬剤に対する服薬拒否を引き起こしうることを指摘したローガンの論文がある。ローガンによると、農民たちは、⁽²⁾体液理論と呼ばれる、食べ物や薬草、病気や薬剤を「熱い」か「冷たい」かのいずれかに分類する発想にもとづいて健康管理を行っている。ここでいう「熱い」／「冷たい」という分類は必ずしも温度によって決まるのではなく、特定の物が本来的にもつ特性だとされる。熱せられた「冷たい」食べ物もあるが、冷え切った「熱い」薬草もある。この体液理論は、古代ギリシアに端を発するが、大航海時代に新大陸にもたらされた。農民たちは、「熱い」病気に対しては「冷たい」薬草や薬剤を、「冷たい」病気に対しては「熱い」薬草や薬剤を摂取することでバランスをとり、回復しようとする。そのため、医師に処方された薬がすでに「熱い」と理解されていた場合、「熱い」病気の患者はその薬の服用を拒否する。このような状況では、農民たちがどのように病気や薬剤を分類しているのかを知ることが、人々が受容可能な治療を処方するために決定的な重要性をもつことになる。

同じように、人々の病気についての考え方が、治療についての理解に大きな影響を与えている例として、北ナイジェリアのハウサの人々が薬剤の効果をどのように認識しているのかについて明らかにしたエトキンの研究がある。エトキンによると、人々は自分の身体の内側に隣人や親戚から（虫や金属片といった）異物を撃ち込まれることによって病気になることがあると考えている。そのため、異物を体外へ排出することが重視されることになり、そのような効果をもつ薬剤が好まれることになる。具体的には、下痢や嘔吐（おうと）を引き起こす副作用をもつ薬剤がそうでないものよりも効果があるものとして、人々に受けとめられているのである。

これらの報告からは、人間がどのようなメカニズムで病気になるのかに関する理解の仕方には文化的な違いがあり、その多様性をもった理解にもとづいて人々が行動していることが分かる。そうであるならば、インホーンとブラウンが指摘していた

ように、生物医療に対する人々の理解の仕方を知することは、コミュニケーションを円滑に進めるための第一歩として、必ずしも悪い選択肢ではない。

とはいえ、近年の人類学における専門的な議論を踏まえるならば、「文化の違い」という考え方には、いくつかの留保をつける必要がある。二〇二〇年代の人類学者の多くは、このような形で文化がもちだされることを手放しで歓迎するほどナイーブではない。むしろ、居心地の悪さを感じたり、警戒が先に立ったりするはずだ。人類学者にとって、文化は、これから探究すべき謎の在り処^あを示すものであって、それによって何かを説明しつくすことができるようなものではないからだ。背景にあるのは、文化を固定的なものとして考えるのではなく、より柔軟に作られ続けているものとして考える方が適切だという理解である。順を追って説明していこう。

まず明確にしておくべきなのは、ローガンやエトキンが描くような文化的な特徴は、少々、戯画化されたものである可能性⁽⁴⁾があるということである。時代や場所が異なっているので単純な比較はできないものの、私自身が二〇〇五年以降にガーナ南部で調査した際には、人々はむしろ薬剤の用法に通じていたし、生物医療における理解と大きく異なるような形で薬剤を使用しているわけではなかった。私たちは、自分とは異なる環境で生まれ育った人々は、自分たちとはまったく異なる存在かもしれないと想像しがちである。他者を本質主義的に対象化し、最初から壁を作ってしまうことで、対話や変化の可能性をあらかじめ閉ざしていると、見誤る可能性もある。

次に、慎重に吟味したうえで、私たちとは異なる形で病気や健康について理解する人々に出会ったという結論が得られた場合には、それを医学的知識の欠如にもとづく「迷信」として簡単に退けない方が良い。文化を、科学の対極にある何かとして考えがちであることには注意が必要である。例えば、二〇一四年から二〇一六年にかけて西アフリカでエボラ熱のアウトブレイクが起きた際には、先述のように、人々の葬儀や埋葬の方法が感染拡大に拍車をかけたという批判がなされた。しかし、感染が流行している地域の人々の葬儀や埋葬を、感染症に対する知識の欠如と見なし、いても状況は改善しない。葬儀や埋葬のあるべき姿が感染対策によって歪められることによって遺族の悲しみが深まることは、日本においても変わらない。そうであ

るならば、人々の悲しみに共感し、別離の経験と感染対策を両立できるような新しい方法を探していくこと、つまり、文化的に許容可能なやり方と生物医療に照らして妥当なやり方をすり合わせていく必要がある。文化は固定的なものでも所与のものでもなく、つねに変化の途上にあり、生物医療はそのような変化を促す要素のひとつにもなりうる。

（浜田明範『感染症の医療人類学』より）

問1 空欄 A C に入る語句の組合せとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は

8。

- | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|-------|
| ① | A | あるいは | B | しかし | C | とはいえ |
| ② | A | また | B | ただし | C | 加えて |
| ③ | A | たとえば | B | ところが | C | したがって |
| ④ | A | さらに | B | つまり | C | なお |

問2 傍線部(1)「文化の専門家として人類学者が何かしら貢献できる可能性は今でもある」とあるが、筆者がそう考える理由

として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は[9]。

- ① 近年の人類学の議論では、人間の普遍的な特徴の研究よりも、社会における個人のあり方や文化的な多様性の研究の方が、医療実践にとって有益だと考えられてきているから。
- ② 人々が地域や民族ごとに共有する文化の特徴を明らかにすることで、医療実践の障害となっている文化的な要因を特定し、取り除くことができるようになるから。
- ③ 人間の集団のそれぞれがもっている文化的な特徴を理解し、医学的知識と地域文化の調整を図ることは、多様な文化に属する人々の間で適切な医療のあり方を模索する助けになるから。
- ④ 感染症を制御する上ではその障害となる文化的要因の特定が不可欠であり、そのために、個々の人間が肌の外側の世界とどのような関係を結んでいるかに関する知見が役立つから。

問3 傍線部(2)「体液理論」とあるが、この理論について述べたものとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答番号は[10]。

- ① 同じ病気であっても「熱い」か「冷たい」かは場合によって異なるとされ、それぞれの場合に適切だと考えられている食物や薬剤が選択される。
- ② 病気が「熱い」か「冷たい」かは病人自身が感じ取るものとされ、食物や薬剤の選択に際して医者の見立てはしばしば拒否される。
- ③ 「熱い」ものと「冷たい」もののバランスを取ることが重要なので、薬剤や食物が「熱い」場合は冷やし、「冷たい」場合は熱して摂取すべきだとされている。
- ④ 食物や薬剤の性質は「熱い」と「冷たい」の二種類に分類され、罹患した病気と反対の性質をもつ食物や薬剤を摂取すべきだとされている。

問4 傍線部③「文化を固定的なものとして考えるのではなく、より柔軟に作られ続けているものとして考える方が適切だ」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は□。

① 文化には探究すべき謎があり、個々の文化の特性を解明して医療実践に役立てるには多くの時間がかかってしまうので、それよりも、対話を通じて柔軟に生物医療と地域文化の調整を図っていくことを優先すべきだから。

② 調査した場所や時代を考慮せずにある文化を説明しようとする、その文化の考え方を迷信のようなものとして固定的に捉えがちになり、対話の可能性を閉ざして課題の解決から遠ざかってしまうから。

③ 他者の文化を自文化とは異なる本質をもつものと決めつけたり、文化を科学に対立するものだと考えてしまうと、あべき状況を達成するための道すじを相手とともに探る道を閉ざしてしまいかねないから。

④ 文化は必ずしも科学に対立するものではなく、薬剤の用法や埋葬の仕方をめぐる特定の文化がその地域においては理に適っている場合もあり、また、対話を通じてより科学的に進歩していく可能性もあるから。

問5 傍線部④「戯画化されたものである可能性がある」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は□。

① 相手の文化の特徴をある程度描き出してはいるが、その文化の本質までは説明できない可能性があるということ。

② 対象の特定の性質をとりわけ誇張したものであり、現実の具体的なあり方を捉えていない可能性があるということ。

③ 一般人にも分かりやすいように紹介されているが、その反面、厳密に学問的だとは言えない可能性があるということ。

④ 以前に主流だった文化観に基づくイメージであり、現在ではすでに古くなった要素を含んでいる可能性があるということ。

問6

本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は13。

- ① 日本の「空気を読む文化」はパンデミック下での感染症対策に親和的であったが、他方で政府の権威主義的な振る舞いの助長にも繋がったように、文化的特徴の是非は一義的に決定できない。
- ② 西アフリカでエボラ熱が流行した際、英語圏の文化人類学者らが迅速に反応し、現地の人々のリスク行動の存在を明らかにしたことで、「障害としての文化」という発想が一般化した。
- ③ 「障害としての文化」を考察することは医療実践にとって今なお有意義であるが、ローガンらが警鐘を鳴らしたように、文化を固定的なものとみなすことの弊害にも注意せねばならない。
- ④ エトキンによると、北ナイジェリアのハウサの人々に下痢や嘔吐を引き起こす薬剤を好む傾向があるのは、身体に撃ち込まれた異物のせいで病気に罹^{かか}ることがあると考えられているためである。

従来の倫理学は、善悪というものを、個別的な事例の判断から普遍的な根拠としての超越的な真の善にまで延長しようとしてきた。G・E・ムアが、善悪は「黄色」と同様に直観されると述べたときも、かれはそれを普遍的なものとしての観念であるとしなしていた。

しかし、もし善が直観されるとしたら、

A

のはずである。ところが実際は「善いは悪い、悪いは善い」

というように、一人ひとりが感じる善悪は、直感的であるだけに相対的であり、状況に左右され、とめどなくひっくり返されていく。ムアはそうしたものとしての善悪を「自然主義的誤謬（しじゅんしぎてきごひやう）」（自然の経験に還元する誤謬）として退けたのだったが、

——誤謬とされるのが筋違いであって——、「自然の経験」としての善悪こそが倫理学にとって重要なのではないだろうか。

善悪がひっくり返され得るからといって、「善悪は存在しない」とまでいっているわけではない。「善とは何か」「悪とは何か」を問うひとは、真の善を求め、その反対物としての悪を捉えて、直感的な善悪の相対性を乗り越えようとするわけだが、乗り越えられる以前の、直感されるかぎりの「善とはどんな意味か」「悪とはどんな意味か」ということをまず問うべきではないだろうか。

善悪がおのずと知られるものだとして、そのような概念としての善悪について考察してみよう。真の善ではなく「善悪の真実」を求めよう。それは、善いと直感されるものが常に善いものであるとは前提しないでおいて、なぜ、どのような場合にそれが「悪い」とされるのか、逆に、悪いと直感されるものが、なぜ、どのような場合に「善い」とされるのか、「善い」ないし「悪い」とはどのような意味かと問うことである。

⁽²⁾ 具体例を考えてみよう。たとえばだれかと一緒に飲食するとする。そこで分かち合った満足感を通じて何らかの絆が生じ、そのひとを支援したり擁護したりしようという気にさせられることがある。それで盛んに飲み会をしようとするひともあるのだが、そこに参加しながらも、「それはそれ」として判断を変えず、自分自身の考えを貫くひともある。そうしたひとは、し

ばしば変人と呼ばれたり、コミュニケーション障害とみなされて、心理学や病理学の主題とされたりする。

ところが逆に、これまでの倫理学は、一緒に飲食しただけで変わってしまうような判断や行動はまじめに取り上げるべきものではないとしてきたのである。理性的判断と自由意志とが倫理的なものを評価する条件であって、体調に左右されない判断や行動についてしか「善い」とか「悪い」とか評価できないとされた。疲れ、飢え、病^{やま}い、酔い、眠気、あるいは躁^{そく}状態も、これを控除して判断せよ、行動せよとされるのである。

飲食をとにもすることで、「親しき」といった人間関係が生じるし、「空気」と呼ばれるような倫理的な圧力も生じる。これらが判断や行動を変えさせるとはいえ、——あとから分析してそう説明されるのであって——、そうしたものが生じるのは、複数のひとの身体が集まり、そこに酔いや満腹感が加わって、それぞれのひとの気分が善くなったり、悪くなったりするといった体調の変化が、特別な判断や行動を与えようとするからなのではないだろうか。

空腹や満腹、睡眠不足や性衝動や排泄^{はいせつ}欲求その他、身体の状態に応じてひとはみずからの行動を決定したり、他人の判断を評価したりする。それで、飲食を提供するときのように、相手の体調がよくなることを利用して合意を引きだしたり、逆に、病気のひとを休ませるときのように、その意志を無視して行動させたりする。

それは「悪い」ことなのか？ 相手が正しく判断できる体調になるまで行動を控えるべきなのか、愚行と思っても相手の意志を尊重するべきなのか。もし体調を利用したり配慮したりして相手から特定の判断や行動を引き出すことが悪いことだとすると、そこには善悪に関する論点先取（結論が前提に含まれていること）が含まれてはいないだろうか。すなわち、「体調のせいで判断や行動を変えるのは善くない」という論点先取である。

それにしても、判断や行動が善いか悪いとかいわれるのは、理性的で自由な状態にある健康なひとだけなのか。その逆の、「身体の状態に応じて判断や行動を変えるのは善いことだ」という倫理説はあり得ないか。健康な状態における健全な判断と行動ではなく、身体の状態こそが善と悪の判断の条件を構成しているということはないだろうか。

もとより倫理学は「精神の倫理学」であった。精神こそがみずからの善悪を判断し、行動し、他のひとの判断と行動を評価

する。ソクラテスが哲学を「魂（精神）への配慮」と規定して以来、西欧の倫理学は精神を主体Ⅱ主題とする倫理学であった。だが、その反対に、身体が主体Ⅱ主題であるような倫理学があってもいいのではないか。「健全な精神は健康な身体に宿る」といわれてきた。「身体への配慮」も必要であることは知られている。身体が健康であって、はじめてひとは身体のことを忘れて自分のしたいこと、なすべきことに集中できる。そのなかで「魂への配慮」をすることもできるだろう。

それにしても、身体の配慮を十分にして健康になったわれわれが議論する善悪は、何と限定されたものであろうか。むしろ、善悪が問題になるような状況には、いつでもそれに関わるひとたちの身体の状態が絡んでいて当然なのではないか。いじめや貧困や孤立など、不本意な社会状況に追い込まれてしまったひとが体調を崩しつつ思考する善悪もあれば、事故や病気や障害で体調が悪いがゆえに思考させられてしまう善悪もある。何よりも、真剣な思考はひとを疲れさせ、体調を狂わせる。善悪を十分に思考せずに行動するひとのなかには、体調を崩すのが嫌だという理由によってそうするひともあるかもしれないほどである。逆に、体調がよくなるためには、どんな思考もするというひとにも多いように見受けられる。

他方では、だからこそ、精神が言葉のうえでする判断や約束よりも、身を入れて肚の底からする決断と覚悟こそが重要だともいえる。正解か不正解かで評価しようとする教師の面前での言葉より、健康か病気かと診断しようとする医師の面前での言葉より、有罪か無罪かを審判しようとする裁判官の面前での言葉より、寝るまえに自分に向かつてする「明日は早起きしよう」という言葉の方がもっと重要なのではないか——他人にどう解されるかを気にせず口にするのだからである。

言葉か身体かの違いは相対的だとみなすひともいるだろう。だが、わたしは異質なものだと思う。決断なき言葉のうえの判断は抽象的であり、覚悟なき言葉のうえの約束は無責任である。疲労困憊するほどに嘘をつくこともあるが、それは自分が真実を迫られているときである。健康なひとが腕組みをして考える判断や約束よりは、言葉にするまえの、身体の側から生まれてくる判断や約束こそ、そしてまた、言葉のうえでの意志よりも、自分の身体との対話から生まれてくる真実の決断や覚悟こそ、倫理学が主題にするべきものではないだろうか。

直感とは身体の状態によって変化する。超越的なものとしての善悪が直観されるのは精神によるが、世間日用の善悪が直感さ

れるのは身体による。倫理を、意識の思考した結果としてではなく、意識の発生と同時にものとして考えてみよう。意識も思考も、身体に理由があつて出現するのであるのだから、意識の赴くままに善悪を思考しているかぎり、学問と呼べるものにはならない。身体がなぜ善悪を感じ、どのようにしてそれについての意識や、その判断や行動を可能にしているのかを問うべきではないかと思うのである。

人間精神の発生する現場を身体経験の裡に探究する哲学こそが倫理学と呼ばれるべきである。旧来の哲学的倫理学では、ひとは精神があつてそれが善悪を判断すると想定されてきたが、むしろまず善があつて、その実現を目指して精神が出現してくると理解することはできないか。不拔の精神があると仮定するにしても、自然抜きには、その意識が他のすべての個人の意識とおなじ経験であつて、おなじ倫理に従うなどとはいえないであろう。

いいかえると、自由な主体として「個人が従うべき倫理」に対し、まずは「個人となるべき倫理」がなければならない。倫理的問題が生じるその都度に、――すでに確立されている精神が規範を思い出してそれを実行するというのではなく――、問題の発見や解決を目指して精神が発生するという、われわれは常にそうした初発的倫理をやり直しているのではないだろうか。

(船木亨『倫理学原論』より)

問1 空欄 A に入る表現として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。 解答番号は 14。

- ① 悪の観念もまた直観の対象
- ② 善悪の価値観はひとそれぞれ
- ③ すべてのひとにとって善は同一
- ④ 善の本質は説明し得ないもの

問2 傍線部(1)『善悪の真実』を求めよう」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答番号は 15。

- ① 善悪が転倒する事例をもとに、直感される善悪の不確かさを論じようとするということ。
- ② 生存するかぎり直感される善悪の感覚をもとに、正しく判断しようとするということ。
- ③ 様々な直感の経験に基づいて善悪の普遍的な本質を考察しようとするということ。
- ④ 善悪が直感される際の具体的な状況から善悪の意味を捉えようとするということ。

問3 傍線部(2)「具体例を考えてみよう」とあるが、筆者は具体例を通してどのようなことを問いかけているのか。その説明

として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 従来、理性的で自由な状態にある健康なひとだけが倫理的な判断ができると考えられてきたが、身体の状態と善悪の判断は密接に関係しており、身体性を重視した倫理学も成立し得るのではないかと問いかけている。
- ② 従来、その場の空気や相手の体調の変化を利用して善悪の判断を迫ることは倫理に反すると考えられてきたが、その場の状況に合わせて適切に善悪の判断をする方がむしろ倫理にかなっているのではないかと問いかけている。
- ③ 従来、ひとが何かを判断する際に場の空気が作用することは倫理学で重視されてこなかったが、新たに身体の状態によって判断に迷いが生じることがわかり、身体性を考慮した倫理的判断のあり方について問いかけている。
- ④ 従来、体調により判断や行動を変えるのはよくないという考えが常識的であったが、老いや疾患など身体的配慮が必要な場合は、たとえ愚行だと思つたとしても相手の意志を尊重する必要があるのではないかと問いかけている。

問4

傍線部③「精神が言葉のうえでする判断や約束よりも、身を入れて肚^{はら}の底からする決断と覚悟こそが重要だ」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は[17]。

- ① 他者を意識してあれこれ考えることで疲れながら判断や約束の言葉を口にするよりも、頭で考えすぎずに健全な身体状態で決断することが大事だということ。
- ② 他者を気にしながら理性的に考えられた言葉でする判断や約束よりも、体調に素直に従い自身の身体的な実感を重んじてする決断の方が大事だということ。
- ③ 他者との関わりの中で判断や約束の必要に迫られて言葉で言い繕うよりも、自身の体調を鑑みて実際に実行可能なことを決断することが大事だということ。
- ④ 他者の目ばかり意識して上辺だけの言葉でする判断や約束よりも、自然体の自分自身との対話を通じて本心から湧き上がってくる決断の方が大事だということ。

問5

傍線部④「初発的倫理をやり直している」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は[18]。

- ① 倫理的な問題が生じると、これまで重んじられてきた規範に依拠しながら、その問題への対処の仕方を導き出しているということ。
- ② 生活のなかで善悪が問題となるたびに、自由な主体として解決策を考え、それに基づいて行動や判断を遂行しているということ。
- ③ 日常生活において身体が何らかの善悪を感じるたびに、その感覚をもとに意識が発生して判断や行動を実践しているということ。
- ④ 倫理観を問われる際に、自分がどのような精神をもっているかではなく、どのような行動や判断をしてきたかを振り返っているということ。

問6

本文の論の展開を説明したものとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答番号は19。

- ① はじめに従来の倫理学が善悪を極めて狭い視野で捉えていることを批判し、続いて体調によって善悪が変わってしまう現実に着目すべきであると主張し、最後に理性的判断を基礎とする従来の倫理学の限界について論じている。
- ② はじめに従来の倫理学における善悪の捉え方とその問題点について確認し、続いて精神と身体の関係性を踏まえて倫理学のあり方を捉え直し、最後に身体を主題とした倫理学の重要性について論じている。
- ③ はじめに従来の倫理学が精神をもとに善悪を判断していたことを批判し、続いて善悪の問題は身体の状態と関係していることを示唆し、最後に精神と身体の矛盾を解消する倫理学の必要性について論じている。
- ④ はじめに従来の倫理学における善悪の見分け方とその方法について確認し、続いて善悪の判断に身体性が大きく影響していることを指摘し、最後に精神によって規範的に善悪を判断することの難しさについて論じている。

4

次の各問いの傍線部のカタカナに相当する漢字と同じ漢字を使うものを、それぞれ①～④の中から一つずつ選べ。解答番号は[20]、[21]、[22]、[23]。

問1 マスコミの自ジョウ力が問われる

(解答番号は[20])

- ① 寺社がジョウ財を集める
- ② 池の水がジョウ発する
- ③ 双方がジョウ歩する
- ④ 国際ジョウ勢の雲行きを見る

問2 病人を介ホウする

(解答番号は[21])

- ① 今年のホウ負を述べる
- ② 家庭科の授業で裁ホウを習う
- ③ 異ホウの地を旅する
- ④ 社会ホウ仕活動に参加する

問3 金ユウ業について学ぶ

(解答番号は[22])

- ① 支払いをユウ予する
- ② わが子の将来をユウ慮する
- ③ サークルにユウする
- ④ 核ユウ合反応が起こる

問4 さまざまな思いが交サクする

(解答番号は[23])

- ① 経営計画をサク定する
- ② 目がサク視を起こす
- ③ 書物のサク引を作る
- ④ 佳サクだと賞賛される

5

次の各問いの空欄に入る語句として最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つずつ選べ。解答番号は [24]、[25]、[26]。

問1

メディアアリテラシーを身につけ、巧妙な [] に踊らされないようにする

(解答番号は [24])

① ルサンチマン

② シンギュラリティ

③ プロパガンダ

④ トリアージ

問2

生物の能力を模倣した [] による商品を開発する

(解答番号は [25])

① バイオリズム

② バイオロジスト

③ バイオグラフィ

④ バイオミメティクス

問3

自治体がスタートアップ企業を育成するために、[] となって活動場所や資金を提供する

(解答番号は [26])

① オーガナイザー

② イノベーター

③ シンクタンク

④ スケープゴート

6

次の各問いの熟語の意味として最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つずつ選べ。解答番号は□27、□28、□29、□30。

問1 黎明^{れいめい}

(解答番号は□27)

- ① 物事が始まる前
- ② 物事の起こり
- ③ 物事の絶頂期
- ④ 物事の終わり

問2 薰陶

(解答番号は□28)

- ① うっとりとして心地よい気分になまること
- ② 能力などが圧倒的に他に抜きん出ること
- ③ 時間や労力をかけて完成させること
- ④ 徳の力で人を感化し教育すること

問3 趨勢^{すうせい}

(解答番号は□29)

- ① 課題が決着すること
- ② 不利な状況にあること
- ③ 物事が進んでいくさま
- ④ 持って生まれた運命

問4 演繹^{えんえき}

(解答番号は□30)

- ① 本質を見せかけること
- ② 実践を通じて身につけること
- ③ 人前で自説を述べること
- ④ 一般から具体を導くこと

[出典]

1

久留島 浩. 歴史系博物館の可能性.(岩城卓二, 高木博志編『博物館と文化財の危機』所収) 人文書院, 2020, p. 56-62.

2

浜田 明範. 感染症の医療人類学 : ウイルスと人間の統治について. 青土社, 2024, p. 28-34.

3

船木 亨. 倫理学原論 : 直感的善悪と学問の憂鬱なすれちがい. 筑摩書房, 2024, p. 170-176.